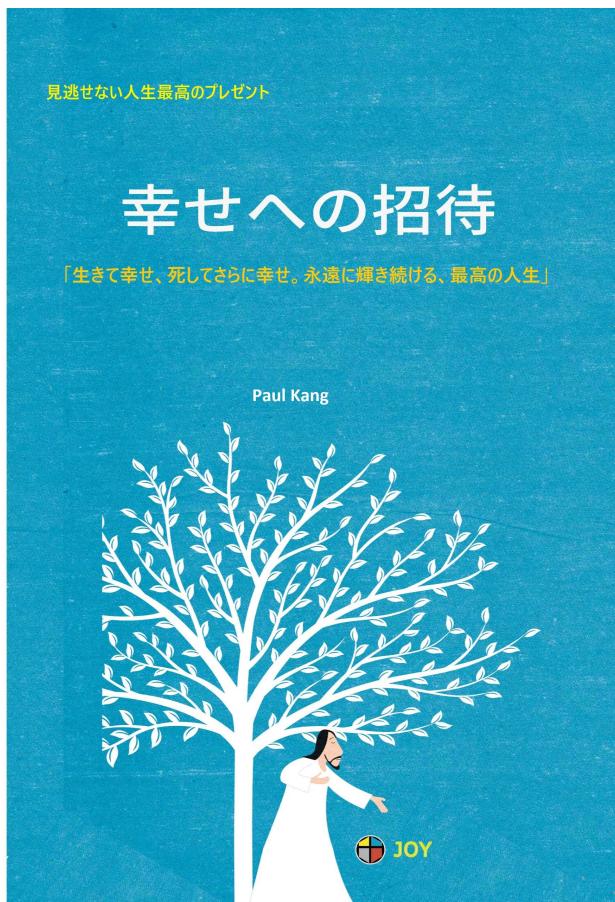


日本語

信仰入門用の聖書学び  
(Bible Study for Beginner)





## まえがき

現代の人々は、高度産業の最先端技術や大量消費社会の中で、人間よりも高性能な機械やソフトが重視される時代を生きています。こうした社会システムの中では、人間関係がますます希薄になり、孤独を感じたり、仕事による大きなストレスに苦しんだりすることが少なくありません。また、人々は忙しさに追われるあまり、自分を振り返ったり、生きる目的や方向を考えたりする余裕すら失い、ただ流されるように日々を過ごしています。その結果、いつの間にか自分を見失い、機械のように同じ生活パターンを繰り返すだけになってしまいます。そうして人間として本当に大切なものを失い、心の空洞は大きくなり、その傷はますます深くなっています。同時に、「人間としての尊厳をもって生きたい」という心の願いや渴きも強まっていくのです。

本書は、こうした現代の人々に聖書の素晴らしさを伝え、人間本来の姿や生きる目的を考えるきっかけを提供することを目的としています。また、失われていた神様を見いだし、そこから真の自分を取り戻す手助けとなることを願っています。聖書のマタイの福音書4章4節には、「人はパンだけで生きるのではない」と記されています。それならば、私たち人間の幸せのために、パン以外に何が必要なのか——そのことを共に考える機会となれば幸いです。

## 聖書学びへのご案内

- 聖書学びを始めたことは、あなたの人生において非常に大事な機会になると思います。最後まで最善を尽くすようにしましょう。
- ベストは1週間1回、最低1時間半程度の時間を作ることです。ただし、状況に合わせて時間調整を行い無理のないようにしましょう。
- 各 Chapter の最後には、"コラム"があります。前もって読んでくるようにしましょう。もっとよい学びができるでしょう。
- あまり義務的にならないように、遊びやゲーム、食事会、相談などもしながら楽しくできるようにしましょう。
- テキストの学びだけではなく、互いの考え方や生き方を共有することも大事な学びです。

※Part 2はイエス様を受け入れた方のための学びです。

## 目 次

### Part 1 救いに至る福音

- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| <i>Chapter 1</i> | 人間と宗教 7         |
| <i>Chapter 2</i> | 創造主の神様 21       |
| <i>Chapter 3</i> | 現代人とその心 31      |
| <i>Chapter 4</i> | 創造主の神様との断絶 43   |
| <i>Chapter 5</i> | 仲介者、イエス・キリスト 57 |
| <i>Chapter 6</i> | 神様との和解 69       |
| <i>Chapter 7</i> | 救いの福音 81        |

### Part 2 救いの確信

- |                   |              |
|-------------------|--------------|
| <i>Chapter 8</i>  | 救いの確信 95     |
| <i>Chapter 9</i>  | 新しい人生と挑戦 109 |
| <i>Chapter 10</i> | 救いの証し 119    |

付録 1 自分の救いに対する確認 126



# 1

## 人間と宗教

人類の歴史が始まった当初から、神を求める行為は人間の本質的な生き方の一つでした。それは誰かに強制されたり、学習したりして身につけたものではなく、人間に本来備わっている「自発的な本性」の現れだといえるでしょう。

特に私たち日本人は、古くから「八百万（やおよろず）の神」という言葉に代表されるように、すべての存在に神が宿る、あるいはすべてが神になり得るという独特の宗教的思想を育んできました。

2018 年の統計によれば、日本全国には約 8 万 4,000 の寺院、約 8 万 8,000 の神社、そして約 8,600 のキリスト教教会が存在します。宗教人口は減少傾向にあるといわれながらも、統計上は今なお 1 億 8,000 万人を超えていました。これは、子どもを除けば、一人が平均して二つの宗教的背景に関わっている計算になります。まさに、日本人と宗教がいかに密接な関係にあるかを示す「生きた証拠」といえるでしょう。

これほどまでに宗教や神とともに歩んできた日本人だからこそ、その存在を避けて通るのではなく、真正面から向き合ってみることが大切ではないでしょうか。神について考えることは、結局のところ「自分自身を知る」ことであり、自らの生き方を深く見つめ直す、最も重要な機会となるからです。

## 1. 聖書の創造主の神と人間の接点

### 1) 人間を造られた創造主（目に見えない靈的存在）

神様は天地万物の造り主であり、目に見えない「靈的な存在」です。聖書は、人間と神様との特別な関係について次のように記しています。

[創世記 1:27] 神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。

ここでいう「神のかたち」とは、外見のことではなく、神様の「内面的な性質（靈性、知性、意志、超越性や愛など）」を指しています。神様はご自身の姿に似せて人間を造られたため、私たち人間とその造り主である神様との間には、本来、切っても切れない深く親密な関係が存在しているのです。

#### • 精霊的存在とは何か

では、「靈」とはどのような存在なのでしょうか。イエス・キリストは次のように語られました。

[ヨハネの福音書 4:24] 神は靈ですから、神を礼拝する人は、御靈と真理によって礼拝しなければなりません。」

目に見えない「電波」や「磁場」を想像してみてください。これらは形を持たないため、特定の場所を占領することができなく、空間や時間の制約をほとんど受けません。もし電波が物体のように形を持っていたら、この宇宙は電波だけで埋め尽くされ、私たちが存在するスペースはなくなってしまうでしょう。

この世界は、目に見える「物質」と、目に見えない「エネルギーや波

動」が互いに関わり合って成り立っています。私たちの肉眼では捉えることのできない神様は、形という枠に縛られないからこそ、時空を超えてあらゆる場所に存在し、私たち一人ひとりと関わることができる「靈的超越者」なのです。

## 2) 人間も神に似せて造られた靈的存在（創造主との交わりができる）

神様は人の体を造り、その後鼻に「いのちの息」を吹き込まれました。

創世記 2:7 神である主は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。

ここで言う「息」は、ヘブライ語で「ニシャマ（Neshamah）」と呼びます。これは単なる空気ではなく、神の呼吸、エネルギー、生命力といった神の性質そのものです。これにより人間は、見える世界と関わるための「体」と「魂（心）」だけでなく、目に見えない絶対者（神）と交わるための「靈」を兼ね備えた存在となりました。神様は、人がご自身を見つけ、交わりができるように、必要な能力を完全に備えてくださいましたのです。

[テサロニケ人への手紙 第一 5:23b] あなたがたの靈、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。

このように、人間は「靈・魂・体」の3側面を持つ、多層的で神秘的な存在です。神はこれらすべての要素が損なわれることなく、いつまでも保たれることを願っておられます。

[ローマ人への手紙 1:19] 神について知りうることは、彼らの間で明らかです。神が彼らに明らかにされたのです。

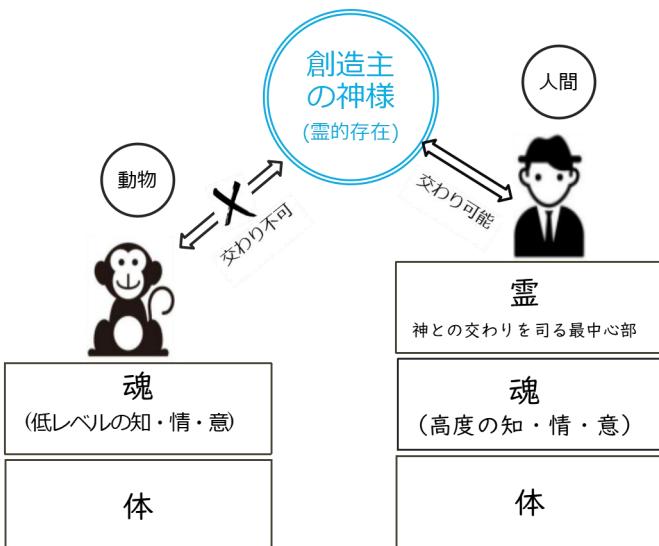
したがって、人間は本能だけで生きる動物とは決定的に異なります。人間に「神を知りたい」という心さえあれば、神様をいくらでも深く知ることができますように設計されています。

人間を造り、深く愛しておられる神様が、その人間にご自分を隠し続けることはありません。親が子に自分を知らせるように、神様も私たちにとって「最も分かりやすい形」でご自身を現してくださるのです。

### 人間は動物と違う靈的存在であり神と交わりができる証拠

- 良心の呵責と、死や死後への畏れ
- 神を求める心、救いを願う祈りの心
- 崇拝の対象を求める心（被造物の神格化）

（その他、「超越的価値に生きる存在」：愛、慈悲、道徳性と良心、人生の目的、豊かな中の空虚など）



「創造主の神と人間の関係」

動物には靈がないため、神様と交わることができませんが、人間は靈的な存在なので、靈として存在する神様と交わることができるのです。

### 3) 神様が人間との交わりを求める目的

前述の通り（創世記 1:27）、神様は人間を動物とは異なる「道德心」や「靈性」を持つ存在として、ご自身に似せて造られました。それは、人間が神様と親しく言葉を交わし、心を通わせることができるようになるためです。

それでは、私たちは具体的に誰と交わりを持つことができるのでしょうか。以下の聖句を確認してみましょう。

[ヨハネの手紙 第一 1:3] 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。

神様は、私たちが孤独のうちに歩むのではなく、天の父である神様、そして救い主イエス・キリストとの深い交わりの中に生きることを願つておられます。

#### • 人間に影響を与える、目に見えない2つの存在

では、なぜ神様はそれほどまでに、私たちとの交わりを求めておられるのでしょうか。その理由を、私たちの敵である「盗人（悪魔）」の目的と比較してみましょう。

[ヨハネの福音書 10:10] 盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかなりません。わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです。

### • 盗人（悪魔）の目的

私たちの喜びや平安、尊い人生を「盗み、殺し、滅ぼす」ことにあります。神様との関係を壊し、人間を絶望へと引きずり込もうとします。

### • 神様（イエス・キリスト）の目的

私たちが本当の意味での「いのち」を得て、それを「豊かに」味わうためです。神様が私たちとの交わりを求めておられるのは、私たちが神様の愛の中に留まることで初めて、虚しさや恐れから解放され、真に満たされた人生を送ることができるようになるからです。これこそ、子どもを持つ親の心ではないでしょうか。

## 2. 日本社会における「宗教」の認識と誤解

日本人の宗教に対する認識は非常に複雑で独特なものであり、一言で説明しきることはできません。多くの日本人は、生活の中に神社参拝や仏教行事などが深く根付いている一方で、「宗教」という言葉に対しては強い警戒心や先入観を抱く傾向があります。この社会的な認識は、過去の特異な出来事や偏った情報によって形成された部分も大きく、必ずしも宗教本来の姿（事実）を捉えているとは限りません。

そこで、現在の日本社会が抱いている宗教への認識や、そこにある「誤解」について、一度冷静に整理して考えてみましょう。

### ① 「すべての宗教は同じ」という誤解

#### • 追求」の宗教と「恵み」の宗教

一般的に「宗教」とは、人間が神に近づこうとする行為であり、よく「山登り」に例えられます。「どのルートから登っても、最終的には同

じ山頂にたどり着くのだから、何を信じても結果は同じだ」という考え方です。



このように、多くの宗教は、人間側からの絶え間ない修行や善行といった「**追求の行為**」によって救いに至ると教えています。これらは、いわば「**追求の宗教**」と呼ぶことができます。

しかし、キリスト教はこれとは正反対です。聖書は、不完全な人間がいくら努力しても、自力で聖なる神にまで到達することはできないと教えます。だからこそ、神であるイエス・キリストのほうが、人間を救うためにこの世へと降りてきてくださいました。

[ヨハネの福音書 3:13] だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。

キリスト教における救いとは、人が山を登りつめて手にする「報酬」ではなく、私たちのところまで降りてきてくださったイエス・キリストを信じて受け入れるだけで与えられる、一方的な「プレゼント（恵み）」なのです。そのため、キリスト教は「**恵みの宗教**」、あるいは神が救いの道を示してくださったという意味で「**啓示の宗教**」と呼ばれます。

#### • 「どの宗教も同じ」という誤解

もう一つお伝えしたいのは、「宗教」という同じ括り（くくり）にあるからといって、すべての中身が同じだと考えるのは、非常に危険だということです。たとえるなら、結婚を考えている人に向かって「男なら誰でもいい」「相手が誰でも結婚生活は同じだ」と言うようなものです。これほど乱暴で無責任な話はないでしょう。

結婚相手が違えば、その後の人生がまったく変わってしまうように、宗教もその教え、救いの方法、過程、そして結果が根本的に異なります。あなたは本当に「誰とでも幸せな結婚生活ができる」と思うでしょうか。宗教選びは結婚以上に重大です。なぜなら、それはこの世の生活だけでなく、死後の永遠にまで関わる決断だからです。考えてみましょう。

### ②「宗教はご利益を求めるもの」という誤解

多くの人は、宗教を「現世利益（ご利益）を得るための手段」と考えています。確かに、困難な時に助けを求め、何らかの恩恵を期待するという側面はあるでしょう。しかし、宗教本来の役割はそれだけに留まるものではありません。真の宗教とは、単なる「願い事の窓口」ではなく、人間の価値や尊厳、そして愛といった内面的な質を高め、人生をより豊かで真に幸せなものへと導くために存在するべきものです。

言い換えれば、宗教は私たちの毎日の生活に、揺るぎない「意味」を与えてくれるものです。「なぜ私は生きているのか」「どこへ向かっているのか」という問いに答えるものです。

私たちは、この世で得られる目に見えるご利益だけでなく、死後の救いや魂の平安といった、「目に見えない永遠の価値」にも目を向ける必要があるのではないでしょうか。一時的な満足を超えた、永遠に続く祝福こそが、人間が真に探し求めているものなのです。

### ③「宗教は弱い人や変わった人がするものだ」という誤解

宗教性（靈性）とは、人間の強さや弱さに関係なく、すべての人が生まれ持っている普遍的な本能です。強いか弱いかの問題ではありません。しかし、時に「自立してみたい」「何かにすがりたくない」という強がる心が、その本能を覆い隠してしまうことがあります。ですが、無理に

強がることが、果たして本当に幸せなことなのでしょうか。

### • 「強がる不幸せ」と「弱さの恵み」：真の強さへの招待

「強がる不幸せ」と「弱さの恵み」という言葉があります。強がるあまりに自分の限界を認めず、本当に見つめるべき真理から目を逸らしてしまうことは、決して豊かな生き方とは言えません。なぜなら、どれほど強がってみせても、人間はいつか必ず「死」という絶対的な弱さに直面する時が来るからです。弱いから信じ、強いから信じないことはありません。むしろ、人間的に強いと思う人がもっと多く信じるかもしれません。

人間本来の宗教性を認め、神様の前に立つことは、自分を卑下することではありません。むしろ、人間をより人間らしく、誠実な姿にするものです。神様を恐れる（敬う）という「弱さ」を認める人は、実は、死さえも含む「この世のあらゆる恐怖」から解放される強さを手に入ることになります。反対に、神様を否定し、強がって生きようとする人は、一見強く見えても、実は神様以外のあらゆるもの（病、老い、他人の目、未来への不安）に怯えながら生きているのかもしれません。

結局のところ、人間には二つの生き方しかありません。「神様のみを畏れて、他のすべてを恐れずに生きるか」「神様を恐れず、他のすべてを恐れながら生きるか」あなたは、どちらの道を歩みたいと願われるでしょうか。

### ④ キリスト教は「西洋の宗教」で、日本人には合わないという誤解

「キリスト教は西洋から来た、西洋人のための宗教だ」と言われることがよくあります。しかし、事実は少し異なります。まず、キリスト教のルーツは西洋ではなく、アジアの西端に位置するイスラエルにあります。それが西へと広がり、ヨーロッパやアメリカといった国々の近代化、

民主主義、学問、そして科学技術の発展に、計り知れないほど大きな影響を与えたのです。むしろ、「キリスト教が西洋のものになった」のではなく、「聖書という土台があったからこそ、今日の先進的な社会が形作られた」と言うほうが正確でしょう。

聖書に記されているのは、特定の地域や民族に限定された教えではありません。それは「西洋・東洋」という区別をはるかに超えた、人間であれば誰もが求めるべき「普遍的な真理」です。

だからこそ、近代化の恩恵を受けている私たち日本にとっても、聖書は決して「合わないもの」ではありません。むしろ、私たちが大切にしている自由や人権、民主主義の根源にある「素晴らしい価値」を知るための、最も重要な鍵となるのです。

## ⑤ 「死んだら誰もが天国に行ける」という誤解

多くの日本人は、「死んだら成仏して極楽へ行ける」、つまり誰もが当然のように天国に行けると考えています。日本の仏教の主流である大乗仏教では、生前に修行や悟りとは無縁だった人でも、死後に戒名を受け、葬儀を行うことで極楽へ行けると教えています。さらに時代が進むと、「一度念佛を唱えるだけで救われる（一念義）」と説く宗派まで現れました。しかし、これは厳しい現実を前にした人間の「願望」に過ぎないのでしょうか。もし、根拠のない錯覚の上に死後の希望を置いているのだとしたら、その先にあるのは取り返しのつかない後悔かもしれません。

そもそも、仏教の開祖であるお釈迦様は「私を信じれば極楽へ行ける」とは一言も語っていません。そのような教えは、死後約600年を経て、さまざまな思想が混ざり合って形作られたものなのです。

一方、聖書が示す救いには、単なる願望ではない「明確な事実と根

拠」があります。罪のために神様から離れ、滅びに向かうしかなかった私たち人間のために、イエス・キリストが身代わりに「罪の代価」を支払ってくださいました。キリストが私たちのすべての罪を背負い、十字架の上で死なれたという「究極の犠牲」。これこそが、私たちが天国に入るための、神様による公式で確かな証書なのです。この十字架の事実によって、人間には単なる気休めではない「確かな救いの根拠」と、永遠のいのちへと続く真実の道が開かれたのです。

## ⑥ 「宗教は間違った方向へ行くのが怖い」という不安

「宗教は一步間違えると恐ろしいものになる」という不安を抱くのは、現代の日本社会においては無理もないことです。過去に「宗教」の名を借りた団体が反社会的な事件を引き起こし、尊い犠牲者を出したことがあるからです。しかし、その警戒ゆえに「すべての宗教や教会は不要だ」と切り捨ててしまうのは、別の意味で大きな損失となり得ます。美味しいものが落ちた所に虫が集まるように、宗教という大事な所にも神様だけではなく、悪魔や偽預言者などが入ってくるのです。宗教は危ないから考えないという思いこそ、悪魔の最大の戦略かも知れません。

### • 「健全な場所」を見極める目を持つ

たとえるなら、「世の中には不誠実な教師がいるかもしれないから、子どもを一切学校に通わせない」と決めるようなものです。大切なのは、ひとまとめにして拒絶することではなく、何が健全で何が危険なのかを見極める「基準」を持つことです。

歴史の中で何千年も認められてきた伝統的な信仰に対し、社会性や倫理観に欠ける新興の団体には注意が必要です。特に、既存の教えに対して極端な敵意を抱いたり、排他的な態度を取ったりする場所には慎重にならざるを得ません。

### • **自由と愛があるか**

健全な教会には、必ず「自由」があります。出席するのも辞めるのも、本人の自由意志が尊重されます。もし、個人の自由を奪い、束縛や強制があるならば、そこは警戒すべき場所でしょう。

キリスト教の土台であるイエス・キリストは、人々に何かを強いるどころか、むしろ人々の罪を赦すためにご自身の命を捧げられた、最高の愛の体現者です。その生き方を模範とする健全な教会には、人々を支配する力ではなく、人々がいきいきと生き直すための「利他的な愛」が働いています。

もちろん、人間が集まる場所ですから、教会が完璧に愛を実践できているわけではありません。それでも、キリストの愛を指針とする教会は、この社会において\*\*「どこよりも健全で、安全で、温かい場所」\*\*でありたいと願い、門戸を広げているのです。

## 3. 結び

すべての人間には、神を求めずにはいられない本性が与えられています。それは、人が真の幸せと豊かな人生を生きるためです。「これだけは絶対に譲れない」と自分の意思に固執するよりも、真理に対して謙虚に心を傾けることのほうが、自分の人生のためにも、また永遠のためにも、大切なのではないでしょうか。

- (1) 宗教と人間について、新たに感じたことはありますか。
  
- (2) 「2. 宗教に対する誤解」の中で、一番共感できるのは何ですか。



## 【コラム1】聖書の素晴らしさ

これから約3500年前から書かれ始めた聖書は1600年にわたって完成しました。聖書は時代、年齢、人種、国籍を超えて全人類に最も大きな影響を与えていた不变の真理です。人間の生き方に対する知恵、世界の多くの国の興亡盛衰や将来に対する予言、人間の死と死後への教えなど、さまざまな内容とテーマが書かれている不思議な本です。聖書は、神様が人間に与えられた最高の贈り物であり、毎年世界のベストセラー1位の本です。

わたしが大学3年生の時に友達に誘われ読み始めた聖書は、とても新鮮でした。わたしは人生の目標も自信もなくただ遊びばかりでした。心は空しく生きる意味を失ったまま、その時その時の快樂を求めて生きていました。そんな時に出会った聖書は、今までの本とは全く違ひ私の心を揺さぶりました。聖書のことばが私の心に入ると、心は元気を受け躍動し喜びや平安でいっぱいになりました。このように、聖書や真の神様に出会った人々は例外なく、大きな力と変化を受け、この世でもさまざまな影響を与えるようになります。

歴史上では、さまざまな時代や地域で、多くのクリスチヤンが活躍していました。たとえば、政治家ではアメリカリンカーンやルーズベルト大統領、イギリスのチャーチル首相、科学者ではAINシュタイン、ニュートン、パストール、ガリレオ・ガリレー、音楽家のバッハ、ハイドン、ベートーベン、美術家のダヴィンチ、ミケランジェロ、作家のドストエフスキイ、トルストイ、その他ヘレンケラー、マザーテレサのような数えきれない人々がいます。

日本でも国際連盟の事務次長を歴任した新戸部稻造、同志社大学の創立者の新島襄、東京大学の総長を務めた南原繁、矢内原忠雄、作家の内村鑑三、三浦綾子、遠藤周作、社会運動で知られる賀川豊彦、ナチスの虐殺からユダヤ人を救った杉原千畝、サザエさんの作者である長谷川町子、アンパンマンのやなせたかし、野口英世など多くの方がいます。また日本の近代化には、多くのクリスチヤンや宣教師も関わっていました。

最後に聖書に触れ、信仰や真の神を知っていくことは、人生において最高の機会であるに違いないと信じます。